

生涯教育に見る教育の原点

中村 七重

初めて生涯教育を担当することになったのは、平成10年の秋であった。1期合計10回で終了する予定で開始した講座は、継続を重ね総計83回、時間にして125時間を費やし、終了したのは平成15年の夏であった。初めての体験ゆえに新しく発見することも多く、また長期にわたったゆえに考えさせられた点も多かった。5年近くに及んだこの経験から知り得たこと、学んだことを考察することが、この小論の目的である。

I 講座の内容

まず、考察の対象とする講座が、どのような趣旨で行われ、どのように進展していったのかを明らかにしたい。

平成10年10月5日に集まったのは、SOAが配布したチラシの中の、次の講座案内を見て申し込みをした30人の受講生であった。

教養としての聖書—美術館に行く前に—

堅苦しいイメージで敬遠しがちな聖書は、実は他に類を見ない興味深い物語の宝庫なのです。聖書の理解なしに、西洋文化を理解することはできません。ヨーロッパの美術作品に数多く取り上げられている主題を知ることは、美術館を訪れる喜びを増してくれることでしょう。

1. 天地創造、アダムとイヴ：聖書の世界観、人間観
2. ノアの洪水、バベルの塔：神話篇
3. アブラハム、イサク、ヤコブ：ユダヤ民族の確立、三代の結婚を中心に
4. ヨゼフとその兄弟：ねたみと和解
5. 出エジプト：紛争の土地パレスチナとの関係
6. 十戒：旧約の神

第1回目の授業が終了した後で、30人に自己紹介をかねて受講の動機を書いてもらった。「以前から関心を持って

いたが、学ぶ機会がなかったので」と、聖書そのものを動機に挙げた人も数名いたが、8割近い人は、「ヨーロッパに行く」と聖書の知識が必要なことを痛感していた」、「聖書の知識があれば、美術作品をもっと理解できると考えて」等、より幅広くヨーロッパ文化、美術と関連させて、受講の動機を語っている。つまり、「教養としての」という言葉と、「美術館に行く前に」という副題が、多くの人々を呼びよせたようである。

10回の講座で予定していたのは、モーゼが十戒を授かるところまでで、旧約聖書の冒頭の部分のみであった。5回を超えた頃から「継続を」という声が挙がるようになり、結局「教養としての聖書」はその2、その3、その4と更に30回追加され、平成11年12月に終了となった。その2でモーゼ以降の旧約の物語を扱い、その3の途中から新約に移り、最後は現代までのキリスト教の歴史も概観して、計40回の聖書の講座は終了した。

ヨーロッパ文化を理解し、美術作品のテーマを知るために、聖書と並んで必要不可欠なものはギリシア神話である。半年間の準備期間をおいて、「ギリシア神話——その魅力と謎」がスタートしたのは平成12年5月であった。ヨーロッパ文化を理解するために、教養としてギリシア神話を学び、美術作品を鑑賞するという講座の姿勢は、聖書の時と全く同様である。平成15年7月に終了するまでに、5期開講され、合計43回の講義を行った。

宇宙創造神話から始まり、オリンパス12神の物語、英雄伝説、トロイア戦争の物語、ギリシア悲劇など、聖書講座と同様に、多岐にわたり、幅広い分野の講義内容となった。

II 受講生の顔ぶれ

各回とも受講生の数は約30名(最大34、最少28)で、男女の比率は男性が6人に対して女性は24人、つまり1対4の割合であった。平成10年から15年までの全ての講座を受

講した人は15名、すなわち50%の人が聖書とギリシア神話の授業を、5年間にわたり継続して受けたことになる。

年齢層は、大正生まれが3名、昭和10年までが9名、20年までが4名、30年までが14名であった。最年長者は大正11年生まれ、最年少者は昭和29年生まれである(聖書第Ⅱ期30名の分布)。

定年退職後の人が多く(男性は全員、女性も3名程)、女性では子育てが一段落した専業主婦が多数を占めていた。うち一人は、聖徳大学英米文化学科の卒業生の母親であり、親子二代に授業をするという、講師にとっての初体験となった。講座の内容のためか、海外経験の豊かな人が多く、ニューヨークに商社員として駐在した人、仕事で世界各地を廻った人、駐在員の妻として長く海外で暮らした人、年に数回必ず海外旅行に出かける人などもいた。

過去の経歴や学歴を尋ねることは、必要もなく、またすべきではないと考えていたので、受講生たちの詳しい背景は不明である。しかし、講義を重ねる度に確認していったのは、受講生の多くが、一言で言えば「レベルの高い人々」であるという事実であった。話す内容を的確に理解する能力、知識を求めようとする積極的な心、授業に対する誠実な態度など、そのどれもが尊敬に値する立派な社会人であることを示していた。

2ヶ月半で終了する予定で開始したこの講座が、5年もの長期に及んだ最大の要因は、この優れた受講生たちにあった。社会人相手の講座に対して、開始前に抱いていた不安や恐れを払拭し、毎回の準備作業を「苦しい喜び」に変えたものは、熱心に耳を傾けてくれた受講生の反応であった。受講生を選ぶことができない生涯教育の場で、優秀で暖かい誠実な人々がクラスを作ってくれたことは、本当に感謝すべき幸運であったと考えている。

Ⅲ 成功した原因

この講座が一応成功したと判断する理由は、次の事項による。

①開始した時点で、受講生が定員を超えて集まったこと。

またその人数が、5年後も減少しなかったこと。

②終了した時点で、また数ヶ月後の現在も、講座の再開を希望する人が複数いること。

しかし、こうした事実の他に、もっと正確に授業の成功度を測る尺度がある。それは、授業を終了して教室を離れる時に、講師と受講生の心に残る満足度である。それは、声に出せば「楽しかった」という言葉で表現されるものである。「毎週毎週、月曜日が待ち遠しかった」、「楽しく勉

強しています」という感想が受講生から多く出たこと、そして、教える側も、講義をすることが終始変わらず楽しみであったこと、これこそが講義が成功したと判断できる最大の基準である。

では、何がこの講座を成功させたのであろうか。楽しかせた原因はどこにあったのであろうか。考えられる要素は以下の通りである。

①講座内容が受講者のニーズに合っていたこと。

チラシを見て申し込みをした人は、教養として聖書を学ぶこと、並びに美術作品のテーマを理解することを求めている。講座内容が予期していたのと違っていたという声が一切無かったことから、募集案内の文章が正しく届いていたことがわかる。求めているものが与えられるという、受講生にとっては当然の要求に応じた講座内容であったことは、特にスタート時点での満足度を高めたと考えられる。

②内容自体の面白さ

生涯教育で聖書を取り上げようと考えた最大の原因は、単に聖書が西洋文化理解に必要な古典だからではなかった。何よりも講師自らが、最も面白い文学作品と長年感じてきたからである。このことは、ギリシア神話にも全く同様にあてはまる。古典中の古典であり、西洋文化の二大源流である聖書とギリシア神話は、どちらも他に例を見ないほど面白い物語がつまみついていて、決して古くなることがない「永遠のベストセラー」である。講師が感じている面白さや楽しさが受講生に伝わったことも、教室内の楽しい空気を生んだ原因であったと考えられる。

③講義内容が「手作り」であったこと。

第1回目の授業の冒頭部分で述べた言葉は、「私は聖書学者でもないし、美術や美術史を専攻した人間でもありません」というものであった。続いて、学生を相手に長年聖書をテキストとして使用してきたこと、ヨーロッパの美術館を訪ねることが趣味で、絵画の中に表現されている物語を読む楽しさを伝えたいと思っていることなど、何故この講座を開くことにしたのかを説明した。そして、「自己流」(宗教学の観点からではなく、文学として聖書を扱うこと、自分で収集した美術作品の写真を使用すること、そして、講義の中で自分自身の考えを伝えること)で講義を進めることのできた。そして事実、講義の全てが「自己流」であった。無論、原典を調べ直して正確に物語を伝えることは、当然の義務である。しかしそれだけならば、自宅で本を読めばできることで、講義を受けに来る必要はなくなる。問題点を見つけ、考えていることを話し、時には受講生からの意見を聞くなど、毎回の講義のポイントを決定す

ることが、準備作業の最も難しい部分であった。しかし、これがあったからこそ、長期にわたる講座が平板に流れることなく、活気を持続けることができたのだと考える。

また「手作り」の講座は、カリキュラムに拘束されることがなく、時には自由に速度を変えることがあった。前回の講義内容を修正したり、「新発見」を見つけた驚きをかち合ったり、脱線話で盛り上がったりと、時間の使い方は流動的であった。このことは、教室内の空気に柔軟性を持たせ、それが受講生に発言しやすい雰囲気を与え、結果としては「楽しさ」につながっていったように思う。

④美術作品の持つ力

聖書やギリシア神話を題材にした美術作品を講義の中で多用したことも、受講の楽しさにつながる大きな要素となった。ビジュアルな資料を授業の中に取り入れることは、若い学生の場合、きわめて効果が大いことは経験上知っていたのだが、美しいものを見て喜ぶのは大人も同様であった。そしてこの資料が、既製の画集を使うことはせずに、全て「手作り」であったことも、受講生の満足につながっていったように思う。長年にわたって収集した絵葉書や、実際に海外で撮影した写真を使用し、希望者には写真やカラーコピーの配布を行った。写真の現像を注文したり、カラーコピーを人数分揃えたりする作業は時間と手間がかかり、負担を感じることもあった。しかし、この作業を最後まで続けることができたのは、それを評価し感謝してくれる受講生の反応があったからである。「世界に一つしかない写真集ができる」、「どんどんたまる写真のコピーを感謝しながらファイルしている」などという感想は、何よりも準備の労をねぎらってくれる言葉となった。

以上、講座を成功させる原因として考えられる点を4点取り上げてきたが、この全てを可能にさせたものは、「受講生の顔ぶれ」の項で述べた「レベルの高い受講生たち」の存在であった。どんなに面白いテーマを選び、周到に準備を重ねて講義を行ったとしても、それを最終的に活かす力は受け取る側にある。美術作品も、それを美しいと感じる人がいて初めて講義の中で有効な資料として動き出すのである。今回の講義を成功させた最大の要因は、講師のやる気を常に引き出し、準備の手間をいとわせることがなかった優秀な受講生たちだったのかもしれない。

IV 失敗から学んだこと

教育とは人間の行うことである以上、完璧は有り得ない。83回も回数を重ねた今回の講座の中で、失敗を犯したことは言うまでもない。それは、聖書講座が中盤に入った頃

に起こった。回を重ねてきて、それまでの物語がどれくらい受講生の頭の中に残っているかを確かめたいと考えたことから始まった。表情を見ているだけでは判断がつかないことが多く、「クイズ」をしようと考えたのである。もちろん点数をつける気は初めから無く、用紙に答えを記入してもらい、直後に答え合わせをして復習に役立てるつもりであった。

予定通り「クイズ」を行い、答え合わせも終了し、その後は普段通りの授業を行ったのだが、この日のことは、ずっと語り継がれる出来事となってしまった。「先週は冷や汗が出ました」、「血圧が上がりました」と、笑いながらも翌週には「クレーム」が出され、数年後にもなお「先生は一度不意打ちの試験をしたんですよ」と、新入の受講生に告げる人がいるほど、後を引く「事件」になったのである。軽いゲーム感覚で行った「クイズ」が受講生には「ストレス」となったことは、講師が受講生の気持ちを十分に理解していなかったことを示している。

しかしこの失敗は、大きな問題を考えるきっかけとなった。常に真剣に授業を聞き、講座終了後に講義ノートをくれるほど熱心にノートを取り、時には要求もしていないのにレポートを提出したりする人が、テストに対して激しい拒否反応を示したことが意外であったからである。そしてこの拒否反応は、「来週テストをするとわかっていたら、多分全員欠席する」と言った人の言葉で、全員が共有する感情であることがわかった。

つまり、誰にとってもテストは嫌なものだったのである。考えればごく当たり前のこの事実気付かなかったのは、授業とテストがセットになっている学校教育の在り方に慣れきってしまっていたためであった。そしてこの出来事は、大学における授業を見直すきっかけにもなった。常に試験を念頭において授業を受けることが、本来の学習の楽しさをどれほど損なっているかに気付いたからである。

講師も受講生も共に学習の楽しさを満喫した今回の講座の背景にあったものは、「テストをしない」という大前提だったのである。

V 教育の原点を考える

テストをしない、当然評価もしない、単位が取得できるわけではない——通例の大学の在り方とは大きく異なる生涯教育の場に、熱心に通う人たちは、何を求めているのであろうか。

今回の講座の場合、それは純粋に知的好奇心を満たすためであった。教室に集まったのは、学びたいと考えた講座を自らの意志で選んだ人たちであった。そして、講師が教

える内容も自らの意志で選んだものであり、進行速度や教材も自分の考えに従って決めることができた。学びたい人が学びたいものを学び、教えた人が教えたものを自由に教える——正にこれこそ、教育の原点といえる条件であろう。本来、教育とはそのようなものであったはずである。また教育の実りは、楽しさに現れるはずである。5年に及ぶ講座を1回も休むことなく出席した人は、学ぶことが楽しかったからこそ、通い続けることができたのである。

生涯教育の講座を担当して今回学んだことは、教育の原点に立ち帰ることの大切さであった。学びたくないものを強制的に学ばされる、教えたくないものを強制的に教えさせられる——残念ながら、時として起こるこの状況は、教育の原点からはやはり最も遠く外れた在り方である。この状況から「楽しさ」が生まれてくるはずがない。それは「苦しさ」であり、苦しみが長時間続いた時、それは無気力や無表情に変わり、また時には怒りへと姿を変えて荒れた教育現場を作り出すのかもしれない。

また、努力や能力を評価するために必要な試験に対しても、その使い方に対しては、もっと慎重であるべきである。試験をされること、評価をされること、そのストレスに終始追われていることが、学ぶ楽しさを奪っていないかどうか少し考える必要があるのではないだろうか。

無論、生涯教育の在り方を、そのまま学校の現場に採用することは不可能であり、また誤りでもある。嫌いなものも我慢して学ぶことは、成長期の人間にとっては必要な鍛錬であろうし、正当な評価は、学生の努力に報いるためにも必要な手段である。

しかし、学習する真の楽しさを知らずにいる多くの学生たちが、そして教えることの真の楽しさを味わえずにいる多くの教員たちが、もっと楽しさを取り戻し、学校が生き生きと心の通い合う場になることは可能なはずである。そしてそのヒントは、生涯教育の場に隠されているのではないだろうか。